

## SY5-1-1

## 幼児期における行動・コミュニケーション課題への対応

平岩 幹男

Rabbit Developmental Research

## 【はじめに】

幼児期においては、行動やコミュニケーションの課題を抱えている場合、それが発達のばらつきによるものなのかどうかは、簡単には判断できないし、また診断もしばしば簡単ではない。どこの園にも気になる子は少なからず存在し、その気になる子への対応は診断があろうがなかろうが必要になる。

## 【子どもとの心理的距離感】

気になる子に対しては、その気になる行動やコミュニケーションが目につきやすくなるために、子どもとの「心理的距離感」が遠くなりがちであり、そうなればなるほど子ども自身もその距離感、すなわち自分に対して肯定的に接していないと感じ取ることも多い。そうなれば子どもへの介入も難しくなるし、保護者との対応も難しくなる。

## 【よいところ探しと共有】

子どもたちのよいところを見つけることは、意識さえすれば誰にでもできるし、それを意識することによって子どもたちにたいして基本的に肯定的になることが多いので、心理的距離感は近くなりやすい。すなわち指示や対応がやりやすくなる。また見つけたよいところを保護者と共有する、可能であれば保護者をほめることで保護者との関係性も改善しやすい。

## 【ABC分析】

行動やコミュニケーションの課題がなぜ起きているかを、前提条件（原因）：A、行動やコミュニケーション：B、その結果何が起きたか：Cを考えることは大切である。行動の結果を見て注意するのではなく、なぜその行動がおきるのか、どうすればその行動が起きなくなるかを考え、結果として注意される行動を減らすことを考えていく。

## 【切り替えとがまん】

もちろん適切でない行動やコミュニケーションを叱ったり注意したりするのではなく、別の行動などに切り替える、あるいは不適切な行動などをがまんできたらほめるなども具体的な対応としては有効である。

## 【言語発達の遅れ】

言語発達の遅れはしばしば自発言語の遅れで認識されるが、言語はコミュニケーションの道具として使われるものである。発語以前に非言語的コミュニケーション（表情の理解、アイコンタクトや模倣など）と言語的な指示などの理解という基盤が必要なので、単に発語の有無だけでは特に幼児期前期では判断しにくいこともある。もちろん知的発達の遅れや、自閉症スペクトラム障害を抱えている場合もあり、その場合には適切な介入が必要なこともある。

## 【ライフスキルトレーニング】

子どもたちに具体的に指示すること、たとえば「もっと」「ちゃんと」「しっかり」のような表現は、日常的に使いがちであるが、子どもたちにはそれでは伝わりにくい。先述の不適切な行動を切り替えたりがまんしたりしてほめられることも、不適切行動に接する前に練習して、子どもたちがこうすれば「ほめてもらえる」というイメージを持っておくような練習も必要になる。例えばあいさつ一つをとっても、こういうときには「ありがとう」と言おうというだけでなく、実際に口からその言葉を出して練習することが必要であるし、困ったときのヘルプサインなどは練習していなければいざという時には出てきにくい。

## 【全体として】

幼児期の行動やコミュニケーション課題の内容は多岐にわたるが、対応の原則はそれほど特別なものではなく、おそらく意識すれば誰にでもできる。どのような対応をすることが望まれるかは限られた時間ではあるが、なるべく具体例を含めてお話ししたい。なお本講演に関連する多数の動画を作成、公開している。YouTube動画で「うさぎ1号」で検索するか、以下のURLで閲覧することができる。

[https://www.youtube.com/channel/UCOvBVrcUJyGjXIYfOGSUxSA?view\\_as=subscriber](https://www.youtube.com/channel/UCOvBVrcUJyGjXIYfOGSUxSA?view_as=subscriber)